特集

第二の学生時代 ～大事なことはNPOで学んだ

高崎経済大学経済学部教授 ◎ 水口 剛

最初の学生時代

『学びへのいざない』という冊子で「想い出のキャンパス」という特集、「学生時代を振り返って、今の財産になっていることを書いてほしい」と言われれば、「あの時の指導教授の一言で、この道に進むことを決心しました」というようなエピソードが期待されているのだろう、と想像がつきます。そこで自分の学生時代を振り返ってみるわけですが、どう考えても、今につながるエピソードは浮かんできません。当時は部活でスキューバ・ダイビングをしていましたから、バイトをして金を貯めては、伊豆の海や島に潜りに行っていた想い出はあるのですが、それを書いたのでは「遊びへのいざない」だし…

今から考えると、そもそもなぜ勉強するのかも、何を勉強したいのかもわかっていなかったのだと思います。授業に出て試験を受ければ単位は取れます。単位が取れれば、とりあえず卒業もできます。けれども、単位を取って卒業したからといって、何かを本当に学んだのかといえば、そうとは限りません。ここでの教訓は、気をつけないと、何も学ばないうちに卒業してしまう、ということです。

環境保護団体への参加

それでは、そんな私がなぜ、今、大学教員をしていられるのでしょうか。「青春とは人生のある期間ではなく、心の持ち方をいう」と言いますが、それになぞらえて言えば「学生時代とは人生のある期間ではなく、学ぼうという意思のある時代をいう」ということになりましょうか。ちなみに「青春とは」は、「ときには、20歳の青年よりも60歳の人に青春がある。年を重ねただけで人は老いない。理想を失うときにはじめて老いる。」(サムエル・ウルマン作、宇野収・作山宗久訳)と続きます。それはともかく、私は大学卒業後、企業に４年ほど勤めてから会社を辞めて会計士試験を受け、会計士補として働き始めた頃に、バルディーズ研究会というグループに関わりました。

この研究会は、企業の環境問題を研究する会でしたから、ある種の環境保護団体といっていいと思います。当時はそんな言い方はしませんでしたが、今でいうNPOの一種です。もっとも、専属の研究員がいるわけではなく、それぞれに仕事を持った人たちが夕方の６時過ぎから集まって活動していました。中心となるメンバーは、20代後半から40代初めくらいの、建設会社、証券会社、広告会社などの社員や、雑誌記者、フリー・ライター、大学の先生、会計士などです。これが私の転機になりました。

「教わる」から「学ぶ」へ

彼らが集まって何をしていたかというと、その頃、アメリカで脚光を浴び始めていた「社会的責任投資」という考え方を日本にも根付かせようと、調査をしたり、セミナーを企画したりしていたのです。仕事に直接役に立つわけでもないのに、環境に良い企業を積極的に選んで投資することで、地球環境問題を解決しようと意気込んでいました。いつも議論は熱を帯び、時間を気にする人はいませんでした。会社での地位も、年齢も、性別も関係ありませんでした。私にとっては、これが「ゼミ」のようなものでした。

この会を最初に仕掛けたのは、須田春海という人でした。彼は、いつも議論に参加するわけではありませんでしたが、時々、顔を出しては、含蓄のある一言を発して、議論の方向を左右しました。彼は、何も改まって「教えた」わけではありませんが、私は彼から、ものの見方や考え方など、多くのことを学びました。「教わるのではなく、自ら学ぶ」という姿勢を手に入れられたことが、最大の収穫でした。この活動をきっかけに大学の若手研究者の人たちとも知り合い、学会で共同発表などの機会も得て、やがて高崎経済大学の教員公募に応募して採用されたのです。公式には何のカリキュラムも、単位も、卒業証書もありませんが、私にとってこれは確かに「第二の学生時代」でした。